

大阪の学生スポーツボランティアを増やすために  
—大阪から始めるボランティア改革—

大阪経済大学 相原ゼミ B

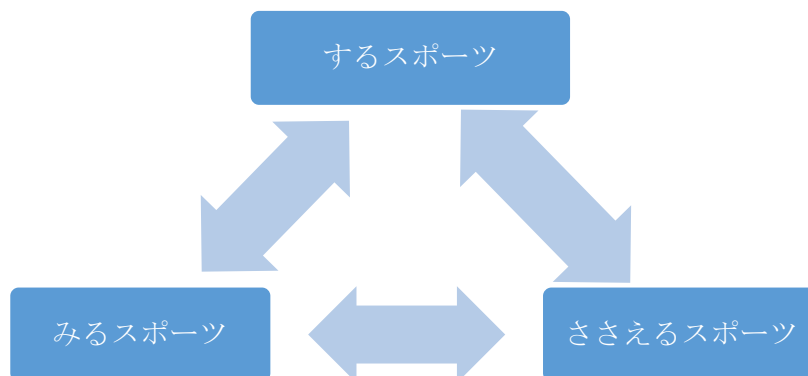
○高橋 直也      中植 大裕      深谷 かずみ      宮本 あかる  
高木 将吾      宮村 歩

1. 緒言

現在、大阪府・大阪市共に多くのスポーツ活動が行われている。また、2019年ラグビーワールドカップ、2020年東京オリンピック・パラリンピック、2021年ワールドマスターズゲームズ 2021 関西と大きな国際大会が3つ続いて日本で開かれることになっており、その大会中に多くのボランティアが派遣されると推測できる。さらにラグビーワールドカップ、ワールドマスターズゲームズ 2021 関西は大阪での試合開催が予定されており大阪での人材確保は必須である。

また大阪府・大阪市共にスポーツ参加へ積極的な取り組みをしており、大阪府・大阪教育委員会の「大阪府スポーツ推進計画」の中で、「だれもが「する」「みる」「ささえる」スポーツに参加できる大阪を目指します」大阪市の「大阪市スポーツ振興計画」の中では「するスポーツ」「みるスポーツ」「ささえるスポーツ」の相関関係を記しており、「する」から「みる」「ささえる」スポーツへ、「みる」から「する」「ささえる」スポーツへ、「ささえる」から「する」「みる」スポーツへの繋がりが重要であることを示している。そこで我々はささえるスポーツからのスポーツ参加者増加を目指す。

図1 「する」「みる」「ささえる」スポーツの相関図



出典：大阪府・大阪市教育委員会（2012）「大阪府スポーツ推進計画」  
：大阪市「大阪市スポーツ振興計画」（2017）より自主製作

## 2. 研究の方法・結果

### 方法 (1) 質問紙調査

- ア. 調査対象：大阪府・兵庫県・奈良県の大学生年代
- イ. 時期：2017年6月
- ウ. 内容：スポーツボランティアの実施状況と実施希望
- エ. 人数：87人

### 方法 (2) インタビュー調査

- ア. 調査対象：大阪市経済戦略局スポーツ課・関西テレビスポーツ局スポーツ事業部
- イ. 時期：2017年6月1日・2017年9月20日
- ウ. 内容：スポーツボランティアの現状・ボランティア講義の現状

### 結果 (1) 質問紙法調査

スポーツボランティアへの参加意思と、スポーツボランティアへの実施状況を中心に質問項目を設けた。参加意思では、「スポーツボランティアに参加したい」が69%、「参加したくない」が31%であった。実施状況では、「参加している」が2%、「参加したことがある」が13%、「参加したことがない」が85%であった。

### 結果 (2) インタビュー調査

大阪市経済戦略局スポーツ課で行ったインタビューで得られた情報

ア. 大阪市スポーツボランティア登録者の数(表1)より、20、30歳代の登録者数が著しく少ないことがわかり、スポーツボランティア人口の高齢化がみられた。

年齢(歳)	~20	21~30	31~40	41~50	51~60	61~70	71~80	80~
人数	3	0	6	26	42	61	79	12

(表1) 出典：大阪市経済戦略局スポーツ課

イ. スポーツを「する」・「みる」・「ささえる」の三つに分け考える。「ささえる」を増やすと、結果的に「する」を増やすことに繋がるということがわかった。

関西テレビスポーツ局スポーツ事業部で行ったインタビュー調査で得られた情報

ア. 実際に行われた、スポーツ大学のボランティアに関する講義の参加人数、広報、ねらいをお話いただいた。第一回目の講義では全6コマで全て違う内容、定員60名に対し12名集まり、初心者ターゲットに行った。第二回目の講義では全6コマで全て同じ内容、定員60名に対し、9月20日時点、2コマで14名集まり、スポーツボランティアに関わったことのある人に対し宣伝と講義を行った。ここから、一度スポーツボランティアに関わると、引き続き関わる機会を持つと多くの人が関わる人が多いことがわかる。

イ. 大阪にはボランティアを募集するサイトが大阪市、大阪府などで行っているがそれぞれが別々で運営されており、探す側が見つけにくいという現状である。そのことから、一元化された新たなプラットフォームの存在が必要であるという指摘をいただいた。

### 3. 現状・課題

(1) 現在、大阪市ではスポーツボランティアが登録制であり、現在の大阪市で実施されているスポーツボランティアの登録者数は229人となっており20歳以下また21～30歳では合計3人と人材の高齢化が進んでいるそのために学生年代のボランティアがとても少ない状況になっている。(表1)

(2) スポーツボランティアの募集は統一されておらず参加希望者が各々で見つけなければならないため目に付く可能性が低い。また強い参加希望がなければ探すに至らないことが多くなってしまう。

(3) スポーツボランティアはアルバイトや趣味などより優先する事項でない状況にあり、時間に余裕があり何かしようとなった時の第一選択肢になっていない。

### 4. 考察

以上のアンケートによるとスポーツボランティアに興味を持っている学生は多く存在するが、実際に行っている学生は少数にとどまっている。その理由は大きく分けて3つに分けられる。

1つは情報源が少ないこと。2つ目に時間がないことを理由に行動しないこと。3つ目にスポーツボランティアの魅力だけでは魅力が小さく感じてしまう事この3つと考えられる。

### 5. 提言

#### (1) 学校の講義として開講する

大学で開講し、大学が斡旋したボランティアに実習として参加することでスポーツボランティアについて学ぶことができる。さらに、単位認定されるため人数を集めやすくなる。また「大学コンソーシアム大阪」を通じ提携大学で講義を開講することで、スポーツ科のない大学生も受講することができるため裾野が広がりやすくなる。

#### (2) プラットフォームの作成

現在、スポーツボランティアに応募するためには各自治体や各イベントのHPそれぞれにアクセスしなければならず、参加希望者が情報を見つけにくい状態になっている。このことがスポーツボランティアへの参加を敬遠される一つの理由だと考え、募集を一箇所にまとめたプラットフォームを作成することを考えた。プラットフォームがあることにより、参加希望者は情報が集約されているため情報を見つけやすく、募集側にとっても以前よりも参加希望者から目に付きやすくなり参加者が増加

する見込みがある。

(3) ボランティア参加者のみ参加可能なイベントを開催

現在の SNS での口コミの影響は大きく、誰しもが発信者になれる時代でありながら、スポーツボランティアについての SNS 投稿数が少ないのは、スポーツボランティアが写真を撮ることや他者へ発信するほどのコンテンツではないということである。そこでボランティア参加者のみが参加できるイベントを開催し、歌手を招いたライブや運動会など、他者へ発信したくなることを実施することで SNS 投稿数を増やし、多くの人の目に留まりやすくする。

6. まとめ

今回の調査・研究によって大学生のスポーツボランティアに対する意識をもとにささえるスポーツを推進させる提言をしてきた。大阪を中心に上げてきたが、これを全国に普及させていくことが日本全体でのささえるスポーツを推進していく中で大切なことであると考えている。また、大阪をスタートとし全国に波及していくことを期待する。そして 2019 年から 2021 年にある「ゴールデンスポーツイヤーズ」を起点とし日本の「スポーツ文化」が発展することを望む。

<資料・参考文献>

大阪市（2017）「大阪市スポーツ振興計画」

<http://www.city.osaka.lg.jp/keizaisenryaku/cmsfiles/contents/0000010/10382/hontai.pdf>

大阪府・大阪教育委員会（2012）「大阪府スポーツ推進計画」

<http://www.pref.osaka.lg.jp/attach/6864/00000000/2403270%20sports%20plan2.pdf>